

式辞（平成21年度）

平成21年度卒業式にあたり、お祝の言葉を申し述べます。卒業生の皆さん、おめでとうございます。人生のなかでも、最も感受性が鋭敏で受容力の強い時期を、騒がしい、一瞬も静まることのない社会から一歩引いた場所で、とりわけ、ここ、皇居と神田古本屋街との中間に位置する神田一ツ橋キャンパスで、学問や友情に包まれて過ごしたことの幸福や有利さには計り知れないものがあります。このことを可能にしてくださったご父母をはじめとするご家族の方々に、本学は皆さんと一緒に感謝を捧げたいと思います。

卒業は社会へのスタートラインであり、すべてがこれから始まるわけですが、このスタートラインに到達するまでの、幼稚園や小学校からの長い道のりを考えれば、卒業生も、ご父母の皆様も、感慨ひとしおであろうと推察されます。とりわけ、大学に入学後は、本学の厳しいカリキュラムのもと、講義に、演習に、そして実習、実技に、ゼミナールに、教室から教室へ渡り歩くような忙しい日々を送り、最終年度においては卒業論文あるいは卒業制作に没頭し、それらのすべてにおいて合格点を得た結果としてきょうの卒業式があるわけであります。

しかしながら、今後の歩みの厳しさを思えば、そう感慨にふけてばかりもいられません。かつてのような人生の標準モデルは今日では失われております。社会は一寸先も見えない状況であります。花火と祝杯で前途を祝うにはあまりにも不安な状況にあると言わなければなりません。

しかしながら、ここで、本学が職業によって女性の自立を促すことを設立理念として発足したことを思い出していただきたいと思ひます。設立当時の女性の社会的立場を思えば、このことがいかに画期的だったかがわかります。つまり本学は、設立当初から、卒業生が、他人頼みではなく、自分ですべて責任を持つという前提で教育を始めたということであり、社会の厳しさはすべての人に一様にのしかかっています。その中で、本学の卒業生には、本学の卒業生としての誇りと自覚をもって、毅然として、社会に、そして自らの人生に対処していただきたいと思ひます。

さらに皆さんに望みたいことは、社会を引っ張る存在になってほしい、ということであり、今ほど社会が有能な人材を求めている時代はありません。ただ他人の指示に従うだけでそれ以上のことは考えない、という無気力・無責任が、こんにちの状況を作り出したと言っても過言ではありません。教養と叡智と社会正義に裏打ちされたリーダーシップを、社会は求めているのであります。そうかと言って、始めから引っ張るわけにはいきません。始めは謙虚に多くのことを学びながらも、いつかは自分の力で社会を、そして周りの人々を幸福に導くのだという気概を持っていただきたい。本学の教育はそれを目指して実践されているのであります。

とかく年配者は、若い人に、人生について語るとき、悲観的な面ばかりを強調するくらいがあるかもしれません。それは、若い人に強く生きていてもらいたいという願いの現れであって、当然のことと言えます。しかし年配者は、心の中では、人生はそんなに捨てたものではないと考えているのです。困難に断固として立ち向かう気力さえあれば、この世は幾多の喜びを提供してくれます。親しい人と心を通わせること、優れた芸術に親しむこと、大自然の息吹に触れることなどはその代表的なものです。さらに身近なところで一例をあげれば、例えばきょう、皆さんのような優れた卒業生を世に送り出すことは、本学関係者とご家族との、共通の夢の結実であります。このような喜びのある社会を、我々は祝福しないではいられません。我々は、皆さんに、将来の夢を託しているのです。辛いこともあるだろうことは疑いありません。しかし、いつもきょうのこの日を思い出して、困難に打ち勝ってほしいと願っています。

終りに、ご列席のご家族の方々に祝いと御礼を申し上げ、卒業生の皆さんの今後のご健康とご活躍を祈念し、式辞といたします。

平成22年3月15日

共立女子大学
共立女子短期大学
学長 入江和生